

さんしゃ Zapping

Vol. 33 No. 1 (通巻 189 号)

2018 年 5 月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsume.ac.jp

<http://www.ritsume.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

[目 次]

< 新任紹介 >

着任のご挨拶	岡田 桂	p. 2
着任のご挨拶	高橋 顕也	p. 3
着任のご挨拶	武田 淳	p. 6
着任のご挨拶	田部 絢子	p. 7
着任のご挨拶	永野 聡	p. 9

< 新任紹介 >

着任のご挨拶

おかだ けい
岡田 桂



本年4月より、産業社会学部スポーツ社会専攻に着任いたしました、岡田桂と申します。どうぞよろしくお願い致します。

私は、出生地は一応東京ということになってはおりますが、幼少期から修士課程までの20数年間を大阪・京都で過ごしましたので、憚りながらも「関西人のはしくれ」を自称しております。その後、博士課程進学を機に関東へ移り、以降、昨年までの19年間を茨城、埼玉、神奈川、東京で過ごして参りました。このたびご縁を頂き、懐かしい京都の立命館大学で心機一転、研究・教育

に携わる機会を賜りましたこと、嬉しく思っております。

研究に関して：

私はもともと、学部時代には英文学を専攻しておりました。アメリカ文学の授業の一環でヘミングウェイについて調べた際、米国においてベースボールという競技が半ば神格化され、独特な雰囲気や纏うことになる過程で、彼のコラムや文章が大きな役割を果たしたことを知り、スポーツを文化として捉える視点に興味を覚えました。当時は、文学の研究科で大衆文化、ましてやスポーツを研究テーマに据えるということにはなかなか難しく、結果として、できたばかりの政策系の大学院に進学してスポーツ政策を修士論文の研究対象としました。博士課程への進学の際、色々と迷った末、文化としてのスポーツと社会の関係そのものを研究する、という意味が固まり、体育学系の大学院に進学してイギリスのスポーツ 特に労働者階級

のマスキュリティとフットボールの関係について研究を継続することになりました。その後、イギリス留学を経て、現在は英米を中心とした地域のスポーツとジェンダー、あるいはセクシュアリティとの関係性について取り組んでおります。

教育に関して:

これまで、スポーツ科学系学部の助手を皮切りに、非常勤を含めて、スポーツの専門学部や文学・国際文化系学部など、さまざまな所属で教育にあたっ

て参りました。そうした中で、体育系の学部でスポーツ歴の高い学生に文化としてのスポーツを教えることと、文学部などで一般学生に向けて授業することの違いを、時には刺激を受け、時には悩みながらも経験してきました。産業社会学部スポーツ社会専攻は、これまでの経験にない中間に位置する組織になると思いますが、本学の学生さんの多様な興味・関心に触れ、新たな気づきを頂けることを楽しみにしております。

着任のご挨拶

たかはし あきなり
高橋 顕也

今春より本学部、そしてメディア社会専攻でお世話になっております、高橋顕也（たかはし あきなり）と申します。今年度は、学部で「基礎演習」「プロジェクトスタディ」「社会調査士 I」および「現代とメディア」を、また大学院で「社会学理論」および「国際プロジェクト II」を担当いたします。

メディア社会専攻の先生方をはじめ、さんしゃの教職員の皆様に快く

迎えていただき、心より感謝いたしております。この場を借りて、着任の御挨拶を述べさせていただきたいと存じます。

私の出身は東北の宮城県ですが、学生時代は、ところは点々としていたものの、ずっと京都に居住していました。よほど居心地が良かったのか、世事に無頓着な生来の気質も災いして、気づくと十二支が一巡するほどの時間を過ごしてしまいまし

た。もう少し学生の自由を謳歌する人生も悪くなかったのですが、さすがに周囲もそれを許容してくれるほど私に絶望していなかったようだし、私も自身への役割期待を自覚できる程度には社会性を持ち合わせていましたので、2014年に京都大学人間・環境学研究科に博士論文を提出し課程を修了いたしました。その後、大阪に居を移し、関西のいくつかの大学で非常勤講師として、小集団教育や社会学の講義に携わってきました。そしてこの度、御縁があってさんしゃへ着任させていただくこととなりました。一度は離京したものの再びこの地の大学へ還ることとなり、京都という街との間にある不思議な絆に感慨深いものがあります。また以前は専ら東奔するばかりで、烏丸を跨ぐことはあまりなかったのですが、今後は衣笠を拠点に西走して脳内地図を拡げていくことを楽しみにしているところです。

さて、職業柄、相手が同業か否かを問わず「どんな学問に仕えているのか」という問いを向けられることは日常です。この場もその例に漏れないのでしょうか、この種のアイデンティティ証明にはどうしてもある種の緊張感を拭えません。それは単

に、「自己について他者に語る」と一般に伴う羞恥や、「社会学」という答えが相手に与えるであろう困惑への予期のためだけではないようです。もともと「社会学をしよう」とか「社会学をしている」などと自覚しながら研究の途へ入ってきたわけでない者にとって、周囲からの問いかけへ応答することを通じて淘汰されてきた「社会学」という場所は、このように自己の遡及的な構成という視点を自然に用いることができるほどには住み慣れてきたつもりですが、やはりどこか借りものまのような気がします。

「社会学」で話が終わってくれず（たいてい終わりません）、「どんな研究をしているのか」とコミュニケーションが接続する場合、貧しい語彙から「理論研究」という四字熟語を取り出すことになるのですが、それでも得心のいった顔を拝見できることはまずありません。返答している当人もそうなので当然です。ここから、行為が、システムが、因果が、機能が、メディアが、近代が……と会話がより具体的（ないしはもっと抽象的）な方向に進むこともあるでしょうが、そうなれなそうであれば、「望遠鏡や顕微鏡を覗いて観察を

行うのではなく、その道具の方を点検したり改良したりするような仕事」といった喩え話をして何とか格好がつくように話を収めたりしています。ただ「石橋を叩いているうちに、向こうへ渡ることを忘れて、叩くことが生業になってしまった」と喩えた方が実像に近いかもしれません。

最後に。ある社会学者が、研究者には大きく分けると「世界が自分の頭から溢れることを好む」タイプと「世界が自分の頭の中に収まること

を好む」タイプがあるといった趣意のことを書かれていました。私は自分で何かをしようとするとしても後者に偏ってしまう人間なのですが、だからこそ、前者のタイプの研究者には敬意を抱いておりますし、体験をするならどちらも歓迎しますので、さんしゃの皆様から多種多様なお話を拝聴できることを楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

たけだ あつし
武田 淳



初めまして、本年度 4 月より、着任しました武田淳です。英語科目を担当させていただいております。こちらに赴任する前は千葉の大学で 4 年間勤務していました。

研究テーマは人の国際移動についてです。千葉の大学に勤める前はオーストラリアに住んでいました。そしてそこで日本人移住者についての研究をしていました。オーストラリアは在留邦人数ではアメリカ、中国につぐ 3 番目の国です。オーストラリアの日本人コミュニティは駐在員を中心に形成された海外の日本人コミュニティとは異なり留学生、定年退職後に移住した方、ワーキングホリデーで来ている方などがあるという点でユニークと言えます。その中でも日本人に人気のある

町、ゴールドコーストやケアンズのあるクィーンズランド州で私はフィールドワークを行い、永住している日本人がボーダーレスといわれる社会の中で日本との繋がりをどのように維持しているかを調査してきました。

現在は 2 つの研究をしています。一つは北海道のニセコの研究です。バブル経済崩壊後、日本のスキー場の多くが閉鎖しましたが、ニセコは逆に外国人観光客の人気スポットになりそれに伴う投資も拡大し、ここ数年地価の上昇率も全国でもトップクラスです。ニセコの町にはオーストラリアスタイルのレストランや英語の看板などがあり、スキーシーズンには客の 90% 以上が外国人でゲレンデでは英語が飛び交いまるで外国のようです。ニセコには観光客だけでなくホテルのスタッフやスノーボードインストラクターとして働く外国人が多く滞在し、またニセコの環境に魅了された外国人移住者の方も増加しています。このニセコの例をもとに多文化社会の形成過程や国際観光が地域社会の変容にどのようにつながっていくのかを調査しています。

二つ目はアジア圏に留学している日本人学生についてです。国際教育のなかでアジアから欧米への留学生の流れが主流ですが、近年ではアジア圏内での留学生の移動が盛んになっています。例えば中国の経済成長は日本も含めて多くのアジアの学生が中国語を学ぶきっかけになり、中国へ留学をするようになりました。韓国に関しては韓流がアジア圏で広がり、K-POPなどが韓国語学習そして韓国留

学のきっかけになったケースも多くあります。私の研究では韓国にいる日本人留学生に焦点をあて、学生たちのアイデンティティーが韓国で生活する中でどのように変化していくかを調査しています。

まだ慣れないこともあります。産業社会学部で教育、研究に邁進していく所存です。どうぞ宜しくお願い致します。

着任のご挨拶

たべ あやこ
田部 絢子



本年4月より着任いたしました田部絢子と申します。ご指導・ご鞭撻くださ

いますようどうぞよろしくお願いたします。

講義は、「特別支援教育」や「介護等体験」、「教育実習」に関する科目を担当しています。現在の主な研究は、発達障害等のご本人や家族、学校、教職員などへの調査を通して、発達障害児者の抱える発達上の困難・支援ニーズを明らかにし、本人たちの声や願いを起点にした支援のあり方を検討しています。特に発達障害児の食の困難と支援ニーズについて研

究を進めています。

さて私は、「道」は出会いや経験により、驚くような展開で拓けることがあるということを学生たちに伝えるようにしています。飛行機一人旅が多かった小学生の頃の私の夢はキャビンアテンダント。広い世界を飛びまわりたかった。中学時代には教師か人の健康を支える職業に、大手新聞社のジュニア記者として活動していた高校時代は新聞記者になりたかった。そして私は結局、管理栄養士か家庭科教諭を目指そうと専門の大学を選びました。在学中はオーストラリアへの短期留学で世界に目を向ける面白さも知りました。ところが卒業時には教員採用試験も管理栄養士国家試験も不合格、食品企業に就職しました。仕事にやりがいを感じていましたが、「じっくりと考えながら人を育て、ともに育つ」ことを大切にしたいと考える自分に改めて気づき、退職。家庭科教諭にもなる、管理栄養士国家試験にも合格すると目標を決め、どちらも退職から4か月以内に達成しました。

まわり道をしましたが、家庭科教諭として東京の私立中学・高校へ。ここで私の人生をさらに広げてくれる多様

な発達ニーズを有する生徒たちと出会うことになりました。大学時代に学んだままでは、現代の子どもたちの抱える課題に伴走しきれないことを痛感する日々。教師という専門職に就いている限り自分自身のアップデートは必須だと思い、教員を続けながら東京学芸大学大学院修士・博士課程に進学し、5年間はまさに寝る暇もないほどに勉学・研究に励み、その理論・知識を日々の教育実践と融合するよう努力しました。その後、大阪体育大学で大学教員としてのスタートをきり、大学内外での貴重な経験をさせていただきました。大阪での5年間を経て、今春より立命館大学に着任いたしました。

このようななかで、私が学び続け、研究を続けているのは、「発達したい」と強く願う障害児者やその家族との出会い、小学校・中学校・高校・大学・大学院時代の恩師たちとの出会いが大きいと思っています。立命館大学の学生たちにも、「いつもの自分」「これまでの自分」の枠にとらわれない挑戦や出会いを大切にして、日々のことで精一杯にならず、広い世界に目を向けてほしいと願いながら、教育・研究に励んで参りたいと思います。

着任のご挨拶

ながの さとし
永野 聡



この度、歴史と伝統があり様々な社会で活躍する数多くのOB/OGを輩出している産業社会学部に着任させて頂きました永野聡と申します。専門は、まちづくり・都市計画です。学部授業は「ソーシャルイノベーション」や「ソーシャルデザイン」を主に担当させて頂きます。

宮城県仙台市の出身でして、仙台と東京に長く居住しておりました。この度、ご縁を頂きまして京都にはじめて居住する事となりました。何もわからない土地でして、日々新しい発見があります。西陣界隈に居住しておりまして、「地蔵盆」という地域に古くからある風習には大変驚きまし

た。京都の歴史的な深度の深さを感じております。

さて、私は、2014年10月に博士(建築学)を早稲田大学にて取得させて頂きました。博士論文のテーマは「戦災復興計画を基礎とする地方都市の緑地整備計画史に関する研究」です。仙台市、水戸市、高知市、旧八幡市(現北九州市)を研究対象として、各都市における緑地整備計画の変遷を調査分析しました。近代における公園という概念は日比谷公園が先駆けとも言われております。その後、戦後の復興期、日本全国に公園が計画・建設されていきます。新しい概念である公園をどう技師達は都市計画に組み込んでいったのか、計画の歴史を紐解いていくと、イギリスのエベネザー・ハワードが提唱した新しい都市形態である「田園都市」に辿り着きます。日本の地方都市における緑地整備の計画手法が、実はイギリスに起源があったという事になります。

学位取得後、オーストラリアの南オーストラリア州にあるアデレード大学建築・都市スクールの訪問研究員として、アデレードの公園緑地の計画変遷を調査研究しました。かつてのオーストラリアはイギリスの植民地でもありましたので、ハウードの「田園都市」の影響を大きく受けている事がわかりました。

以上のように、私は歴史家としての側面もごさいますが、現代の事象にも興味をもっております。研究留学しておりましたオーストラリアの一大産業は観光です。そこで、地域観光プランニングの重要なセクターでもある DOM (Destination Management / Marketing Organization) に関して、アデレードとシドニーを対象として調査研究を行いました。日本は観光庁が 2008 年に出来たばかりです。観光先進国である世界各国 (フランス、イギリス、オーストラリア、他) から学ぶ事は多くございます。私は現在、(一社) 日本建築学会の都市計画委員会・地域観光プランニング小委員会の委員も務めておまして、日本全国の研究者達と学術面からの理論構築も進めております。

帰国後、国立大学法人福井大学産学官連携本部の研究機関研究員として産学官連携のプロジェクトに従事しました。特に、福井県永平寺町とのご縁を頂きまして、現在も地域活性化のプロジェクト (自動走行まちづくりに関する調査研究) を継続しております。

その後、国立大学法人三重大学地域人材教育開発機構の講師として、COC+ (知の拠点大学による地方創生推進事業) に 2 年間従事しました。時期を同じくして、高等教育コンソーシアムみえの組織づくりにも関与しました。三重では、若者を地域に留め置くための各種プロジェクト (地域学の授業、インターンシップ、キャリア教育イベント、等) を企画・立案し、県内 14 高等教育機関の教職員の皆様と一丸となって取り組んで参りました。また、大学コンソーシアムの組織づくりから関与させて頂きました経験は、数多くの学びを得る事になりました。大学コンソーシアム京都様や南大阪地域大学コンソーシアム様の各種取り組みを参考とさせて頂きまして、高等教育コンソーシアムみえの組織を作らせて頂きました。個人的な研究として、三重県の北部に位置する木曾岬町にて中

学生のキャリア教育を実施しました。近年、町が実施した中学生を対象とした定住意向のアンケート調査において、定住意向が1割しかないという結果がでました。これは将来にわたる地域経営が出来ない事を意味しているといえます。そこで、役場と連携し、中学生達に地域で働く大人達との接点を持たせるプロジェクトを組成しました。具体的には、地域で働く大人達の名刺づくりを通して、仕事の現場を訪れ、取材する事を実施しました。また、ジュニア PR 大使として中学生達を町長より任命してもらいました。ジュニア PR 大使を任命された中学生達は、自ら積極的に地域の事を知るように成長しました。また、ジュニア PR 大使の次なるミッションとして、コミュニティービジネスを知ってもらうため、町内の生産者の産品を仕入れ、町内で開くマルシェで売るという取り組みも行いました。商品の値段決めやポップの作成、売り子、等を行ってもらいました。売る行為の裏側を知る事につながり、考え方が大きく変わった中学生もいました。

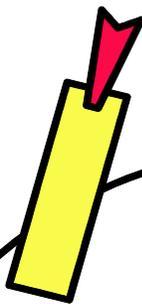
最近の主な研究活動としては、自
動走行まちづくり研究、震災復興ま

ちづくり研究、地域観光プランニング研究、アクティブ・ラーニングの教材開発、等を実施しております。基本的には全国各地のフィールドを対象として、各種プロジェクトを同時並行的に実施しております。体がいくつあっても足りない状況は、ここ5年程度続いております…。自分の専門領域も体形同様に広がり続けておりました、ここ立命館大学での教育研究の日々で、どう変化していくのか、楽しみにしております。体形は博士論文を取得した時期の体重(70kg)に戻す予定です…。いつになるか…。

これまでの経験や知識を用いて、産業社会学部、ひいては立命館大学の教学改革の一翼を担えれば幸いです。最後に、私がいつも大切にしている言葉を紹介したいと思います。それは「頼まれ事は試され事」です。これはライフワークとして取り組んでいる東日本大学震災の復興支援の現場で、地域住民の方より頂いた言葉です。忙しく周りが見えなくなってきた時にいつも呪文のように唱えております。これは、独り言ですので、温かく見守って頂ければ幸いです。

皆様、ご指導・ご鞭撻くださいますよう、何卒よろしく願いいたします。

Zapping 原稿募集



研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字~2,000字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付してください。